

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13466

研究課題名(和文)環境危機の時代における脱成長とグリーンニューディールの批判的統合

研究課題名(英文)A Critical Integration of Degrowth and Green New Deal in the Age of Ecological Crisis

研究代表者

齋藤 幸平 (Saito, Kohei)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80803684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、脱成長とグリーン・ニュー・ディールの比較検討を、カール・マルクスの思想をもとにして行った。最終的に、本研究は、脱成長を支持するとともに、マルクス自身の思想が晩年に向かうにつれて、脱成長と親和的なものになっていったことを明らかにすることができた。『人新世の「資本論」』とMarx in the Anthropoceneで展開された「脱成長 Kommunismus」の考え方は、マルクス研究としてもオリジナリティが高く、気候危機の時代へと19世紀の思想を大きくアップデートすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、資本主義のもとで深刻化する格差と気候変動について、カール・マルクスの思想を用いて、経済システムに手を入れるような、より抜本的な改革が必要であることを示した。本研究が提起した「脱成長 Kommunismus」という未来社会のビジョンは、学術的にもこれまで提起されることがないマルクス解釈として新奇性が高くケンブリッジ大学出版から単著が刊行されたのみならず、コロナ禍と気候変動に苦しむ現実社会への問題提起として、新聞やテレビなどのメディアなどでも度々論じられた。

研究成果の概要(英文)：The current project aimed at a comparative investigation of degrowth and the Green New Deal, from a perspective of Karl Marx. Ultimately, this project supported degrowth, showing that Marx's own thought became more compatible with degrowth in the later years of his life. The idea of "degrowth communism" developed in "Capital in the Anthropocene" and "Marx in the Anthropocene" is a highly original achievement in the Marx study, and it realized a significant update of 19th century thought into the era of the climate crisis.

研究分野：経済思想

キーワード：脱成長 マルクス 気候変動 Kommunismus 資本主義

### 1. 研究開始当初の背景

現代社会が直面する疫病・気候危機・戦争・右派ポピュリズムなどから生じた「ポリクライシス」は、新自由主義のみならず、資本主義システムそのものの効率性や正当性に疑念を投げかけるようになってきている。このようなポリクライシスが、ソ連崩壊以降停滞していた「ポスト資本主義」をめぐる議論を活性化させるようになっていた。そこで、本研究は、「脱成長」・「定常経済」と「グリーン・ニュー・ディール」という二つの対立したビジョンを比較検討することで、両者の理論的困難を克服し、ポリクライシスを乗り越えるポスト資本主義像の具体的な展開を目指したのである。

その際には、カール・マルクスの思想を手がかりとすることで、より体系的な資本主義批判とポスト資本主義の姿を描くことを目指すことにした。

### 2. 研究の目的

本研究の当初の目的は次のようなものであった。つまり、脱成長とグリーン・ニュー・ディールのそれぞれが抱える困難を解消するような代替案を提示することにあつた。その際、本研究の独自性は、一見相反するよう見える両者を敢えて統合することによって、理論的困難を解消しようと試みることを目指したのである。具体的には、財政出動・反緊縮政策を通じて、資本主義の論理に歯止めをかけつつ、定常経済に移行する可能性が存在しないかを探っていくことを目指したのである。

### 3. 研究の方法

その際には、脱成長とグリーン・ニュー・ディールのそれぞれがどのような主張を行っているかのサーベイを踏まえ、その上で、資本主義社会に代わるようなオルタナティブの道を示すような対案を模索しようとした。具体的には、労働時間の削減、脱商品化、限界費用ゼロ社会といった議論に注目することで、脱成長を必ずしも「緑の緊縮」へと矮小化しないような形で、グリーン・ニュー・ディールと統合することを目指したのである。

### 4. 研究成果

(1) 先行研究を調べたり、研究者たちと議論しているなかで、経済成長を重視するグリーン・ニュー・ディールをポスト資本主義の議論に接合することの困難に早々に気がつくことになった。一方、資本の無限の価値増殖に終止符を打とうとする脱成長の方が、ずっとラディカルな要求であることが判明した。その限りで、両者を統合するというアプローチは早々に断念し、むしろ、脱成長をマルクスの思想と融合することを目指すことにした。

(2) そもそもグリーン・ニュー・ディールは雇用や格差を重視するなかで、持続可能性や気候正義の問題を二酸化炭素排出量に矮小化していることが判明した。たしかに、二酸化炭素の排出量だけに着目すれば、再生可能エネルギーや電気自動車によって排出量を削減しつつ、経済成長を達成することにも一見すると実現可能性がある。だが、さまざまなレアメタルやバイオマスなどの資源、ならびにそれらを生産する労働力が、本当に持続可能かつ公正な形で利用されるかは怪しい。むしろ、これまで以上にグローバル・ノースがグローバル・サウスからの収奪と植民地支配を強めることになりかねないのである。

あるいは、経済成長を目指してのさらなる労働倫理が加速するだけの結果になってしまうのであれば、例えば、ジェンダー平等が犠牲になり、ケア労働は周辺化され続けるだろう。より包括的な平等と持続可能性を目指すプロジェクトとしては、グリーン・ニュー・ディールは狭すぎるということが判明するのである。

また、グリーン・ニュー・ディールは、資本主義のもとでの技術革新に過度の期待をかけることで、本来もっと強調されるべき施策を過小評価する傾向がある。それは例えば、短距離国内線の禁止や広告の禁止、大型自動車の禁止などの措置である。

そのような案が、グリーン・ニュー・ディールの支持者から提起されることはほとんどない。しかし、それでは結局グリーン・ニュー・ディールは資本主義のための財政出動と雇用創出にしかならないのであり、ポスト資本主義のビジョンとしては不十分である。実際、現在の過剰な消費主義にブレーキをかけない限り、パリ協定が求めるような形での脱炭素化の実現は不可能といてよい。

(3) それに対して、脱成長は、より広い視点から、持続可能性や公正の問題を捉えており、それこそが、これまでの資本主義のもとで引き起こされてきた搾取や略奪、抑圧などの問題を真摯に解決していくために必要な発想であることが判明した。

その際、脱成長はしばしば誤解されているような清貧の思想ではない。むしろ、社会保障や公共サービスを拡充し、より平等な社会を作っていくことで、多くの人にとって、生活の安定やウェルビーイングの改善をもたらすことを目指すのである。

( 4 ) 脱成長の思想のメリットは、まだ現実味のない将来の技術に過度に期待をかけるかわりに、現在すでに利用可能な手段を重視する。それは、再生可能エネルギーだけではない。むしろ、( 3 ) で述べたような、過剰な消費を抑制し、0・1%の超富裕層の振る舞いを是正することで、平等と持続可能性の両者を追求するのである。

( 5 ) 当初、マルクスの思想と脱成長は相容れず、それゆえ、グリーン・ニュー・ディールのような政策を媒介として、ポスト資本主義を構想する必要があると考えた。だが、晩年のマルクスの思想を再構成していくなかで、マルクスのコミュニズム像が大きく変容していったことが明らかとなった。マルクスは、みずからの技術楽観主義を是正するとともに、ヨーロッパ中心主義的な思想も反省するようになっていったのである。そうしたなかで、ロシアに代表される非西欧社会を研究するようになっていく。その結果が、最晩年の「ザスーリチ宛の手紙」で展開された「脱成長コミュニズム」である。

( 6 ) その際には、『マルクス・エンゲルス全集』を用いて、抜粋ノート研究を行うことで、これまでのマルクス研究では明らかにされてこなかった晩年の思想が明らかになった。それはエコロジーと脱成長をめぐる新しい知見をもたらすものになった。

( 7 ) 「脱成長コミュニズム」は、これまでの脱成長の議論が、反資本主義を十分に強く打ち出してこなかったことへの反省を迫る。同時に、これまでのマルクス主義が環境問題を副次的にしかなかったことに、脱成長に敵対的な態度を示してきたことへの批判にもなっている。その意味で、脱成長コミュニズムの可能性をマルクスの思想として示したことは、非常にオリジナルで、さまざまな論争の契機になるような成果をあげることができたといえる。これは、21世紀の新しい左派環境運動の可能性を切り開くものである。

( 8 ) また、晩期マルクスの「脱成長コミュニズム」という視座を獲得したことで、20世紀のマルクス主義において、なぜこれほどエコロジーや脱成長といった議論が無視されて続けてきたのか、という問いが浮上した。そのような視点から、マルクス主義の歴史を再構成することで、エンゲルスやルカーチ、アドルノなどの思想をエコロジカルな視点から再検討することができた。

( 9 ) その結果明らかになったのは、「方法論的二元論」というマルクスに特有の分析方法であった。具体的には、「素材」と「形態」を分離することに特徴があり、このアプローチは、ルカーチやアドルノにも共通している。

ここでの二元論は、近年流行りの一元論と真っ向から対立するものであり、なぜ環境危機の時代にマルクスの思想が重要であるかを示すもう一つのオリジナルな貢献となった。今後は、このマルクスの方法論をもとにして、ラトゥールやハラウェイの思想と対決していくことを目指している。

( 10 ) 本研究の成果は二つの重要な著作としてまとめることができた。日本語で読めるものが『人新世の「資本論」』(集英社、2020年)である。そして、その後の研究成果も含めてより学術的に体系的な仕方で論じたのが、*Marx in the Anthropocene: Towards the Idea of Degrowth Communism* (Cambridge: Cambridge University Press, 2023)である。

ここで提起された「脱成長コミュニズム」の視点は、マルクス解釈としてもオリジナリティがあるだけでなく、現代社会への改革案としても、大きな注目を集めた。特に、『人新世の「資本論」』は新書対象2021を獲得し、50万部近く売れ、マルクスや思想系の本としては異例の売上になっている。すでに4ヶ国語版での翻訳が刊行されており、今後さらに10ヶ国語以上に翻訳されることが決まっている。

また、*Marx in the Anthropocene* は歴史あるケンブリッジ大学出版局から刊行したのみならず、ガーディアン紙でも取り上げられるなど注目も高く、すでに6ヶ国語での翻訳が決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 齋藤幸平	4. 巻 949
2. 論文標題 気候崩壊とコミュニズム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『世界』	6. 最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Saito Kohei	4. 巻 28
2. 論文標題 Marx's Theory of Metabolism in the Age of Global Ecological Crisis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Historical Materialism	6. 最初と最後の頁 3~24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/1569206X-20202802	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤幸平	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 潤沢な社会とコミュニズム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 6~18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kohei Saito	4. 巻 149
2. 論文標題 Lukacs's Theory of Metabolism as a Foundation of Ecosocialist Realism	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 New German Critique	6. 最初と最後の頁 103-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kohei Saito
2. 発表標題 Marx`Vision des Kommunismus im Anthropozäen
3. 学会等名 Rosa-Luxemburg-Stiftung 14. Marx-Herbstschule (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 斎藤幸平
2. 発表標題 持続可能な開発は可能か—ストックホルム会議から半世紀に
3. 学会等名 専修大学社会科学研究所シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kohei Saito
2. 発表標題 Climate Crisis and Ecological Revolution: Climate Keynesianism, Accelerationism, and Ecosocialism
3. 学会等名 Annual Conference: "Unsustainable Past - Sustainable Futures?" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 斎藤幸平
2. 発表標題 コロナショック、気候危機、脱成長
3. 学会等名 経済理論学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 Bev Skeggs et al. (eds)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 SAGE	5. 総ページ数 1804
3. 書名 The SAGE Handbook of Marxism	

1. 著者名 Leigh Brownhill et al. (eds)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 362
3. 書名 The Routledge Handbook on Ecosocialism	

1. 著者名 Marcello Musto (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave	5. 総ページ数 354
3. 書名 Rethinking Alternatives with Marx Economy, Ecology and Migration	

1. 著者名 斎藤幸平ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 資本主義と危機 世界の知識人からの警告	

1. 著者名 斎藤 幸平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 384
3. 書名 人新世の「資本論」	

1. 著者名 Kohei Saito	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave	5. 総ページ数 292
3. 書名 Reexamining Engels ' s Legacy in the 21st Century	

1. 著者名 斎藤 幸平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 116
3. 書名 カール・マルクス『資本論』 2021年1月 (NHK100分de名著)	

1. 著者名 内田樹編、斎藤幸平、青木真兵、えらいてんちょうノ矢内東紀、後藤正文、白井聡、岩田健太郎、雨宮処凛、増田聡、平田オリザ、想田和弘、?炳匡、山崎雅弘、三砂ちづる、仲野徹、中田考、釈徹宗、池田清彦、平川克美、鷲田清一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 312
3. 書名 ポストコロナ期を生きるきみたちへ	

1. 著者名 齋藤幸平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 224
3. 書名 ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた	

1. 著者名 齋藤幸平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 ゼロからの『資本論』	

1. 著者名 Kohei Saito	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 276
3. 書名 Marx in the Anthropocene: Towards the Idea of Degrowth Communism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------